



パソコンを活用したランゲージラボの試み：メディア室における実践的な英語学習方式の提案

著者	MIYAZAWA Masayuki Massey
雑誌名	表現学部紀要
巻	17
ページ	129-141
発行年	2017-03-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004143/

パソコンを活用したランゲージラボの試み

—メディア室における実践的な英語学習方式の提案

宮澤正幸

—Abstract

This study is based on an accumulation of experimental teaching of practical English at the language laboratory or the Computer Assisted Language Learning (CALL) class at Wako University. This researcher has used personal computers to have students read and record their oral reading in their computer at this CALL class on an experimental basis.

In this paper, this researcher has first expressed the background and the purpose of this study. Then, he has described the recording feature of Windows personal computer and the procedures for its use, along with directions to the students in the classroom. Next, this researcher has applied oral reading and phonics study in this language laboratory, and described effective teaching methods in this classroom. How to check and evaluate the students' oral recording was also explained. Lastly, he has reported the students' feedback and achievement.

Through these oral reading activities at the CALL class, the students have demonstrated positive attitudes toward English-study and later, they have expressed their strong intentions to study English further.

1. はじめに

2011年4月からおよそ6年間にわたり、筆者は、和光大学のメディア室で1年生を対象とした必修の英語クラス（基礎英語）、2年生以上を対象とした中級英語などを担当してきた。1年生のクラスではテキストの読解及び音読に重点を置いた授業を行い、2年生以上のクラスでは、音声学を中心とした音読の授業を行ってきた。これらの授業では、メディア室のパソコンを使ったいわゆるデジタル版「ランゲージラボ」を展開してきた。本研究では、1年生から4年生まで対応可能なテキストの音読中心のランゲージラボの授業の試みについて記述した。

長きにわたるメディア室での授業の運営に当たっては、音声録音に関する技術的なアドバイスを器具の手配、教室の使用などで情報室システム系の担当者にお世話になった。特に、同係の中里氏には、ほぼ毎年、年度初めの授業に出席していただき、学生へのオーディオ機器の使い方の指示やトラブルに対処していただいたので、ここに感謝の意を表したい。

2. 本研究の背景と目的

今から数年前までは、テープレコーダーを使用したアナログ式のランゲージラボが教育機関や語学学習者（特に英会話学習者）の間に評判を呼び全盛を極めていた。このランゲージラボでは、学習者が各自のブースに入って自分たちの音声を録音して聞き返したり、専用のソフトウェアの指示に従って口頭でQ&Aを繰り返すというもの。この語学学習方法は、学習者が自らの音声を録音して何度も聞き返すことにより自分の音声を客観的に聞き取って発音やアクセント、読み方の癖などの欠点を矯正することができるので、実践的な会話力を身につけるうえで学習者にも教師にも定評があり、全盛期には、大学や専門学校のみならず語学学校を含めた教育機関などあらゆるところに設置されていた。ところが、2010年ごろからパソコンを筆頭に機器のデジタル化が急速に進み、アナログ方式のテープレコーダーを使用したランゲージラボは現在では姿を消してしまった。このアナログ方式のランゲージラボにとって替わったのがパソコンを設置したCALL（Computer Assisted Language Learning）教室で、学生一人に対して一台のパソコンの使用環境を実現した。筆者が教鞭をとる和光大学でもデジタル化の波が押し寄せて、時期をほぼ同じくして、テープレコーダーのランゲージラボに替わってCALL教室⁽¹⁾が設置された。

さて、和光大学におけるCALL教室以前のテープレコーダーのランゲージラボでの英語学習の授業を振り返ってみると、当時のランゲージラボ教室の稼働率はかなり高く、語学授業の割当時間帯（平日の午前中）は、ほぼすべての教室が埋まっていた、筆者は教室を確保するのに苦労した記憶がある。ところが、テープレコーダーのランゲージラボが廃止されてパソコンに替わったとたんに、この盛況ぶりにもかかわらずCALL教室での音声を録音するランゲージラボ的な使用は、ごくわずかとなり、これから説明するサウンドレコーダー機能（または同等の機能）を使用したランゲージラボとしての常用的な利用は、筆者の授業のみとなってしまった⁽²⁾。

ここで浮かび上がってきた一つの疑問は、あれほどまでにテープレコーダーのランゲージラボに依存していた多くの教員が、なぜCALL教室のランゲージラボ的な使用に移行しなかったのか、あるいは移行できなかったのかという点である。残念ながら筆者自身がこれらの教員と直接接触する機会がなく確認する手段がないので、今のところ真の原因を知る術はないが、何人かの同僚の英語教員たちと意見を交わしているうちにいくつかの理由らしきものが浮かび上がってきた。その中で我々が最も注目したのは、パソコンでの録音・再生・提出機能の使用手順の煩雑さである。パソコンの場合は、いくつかのボタン操作で簡単に録音や再生ができるテープレコーダーと違い、その都度アプリケーションプログラムを起動して、録音プログラムを画面に表示し、録音が終わったら音声ファイルをフォルダーに保存して、教員のフォルダーへドラッグしてドロップするというような手順を踏まなければならない。既成の高価なプログラムを導入しない限り、学生はこれらの手順をその都度踏まなければならない。また、学生に対するこれらの手順の説明と管理が教員の

負担となってくる。結果として、面倒になって移行をあきらめるか途中で挫折せざるを得なくなってしまう。実際のところ、筆者も CALL 教室での音声録音機能を駆使したランゲージラボを開始するに当たり、上記のようなソフトウェア的な問題に加えてハードウェア的にもいくつかの問題に直面し、葛藤してきた。そのような状況にも拘わらず、筆者が CALL 教室でのランゲージラボの導入をあきらめなかったのは、CALL 教室の利点が大きく、学生が得るもの及び教員の達成感は計り知れないものがあると考えたからである。

今後、より多くの教員諸氏にパソコンの音声録音機能を使用したランゲージラボの利点を知ってもらい、また、すでに知っているが CALL 教室での使用を断念してしまった教員諸氏に、使い方を理解していただき CALL 教室に戻ってきてほしい、さらに、英語学習に取り組んでいる学生にかつてのランゲージラボの利点を大いに活用してもらうためにも、参考または役に立ってほしいという思いで本研究を発表することにした。

3. CALL 教室でのランゲージラボの使用方法

2011 年度に初めて和光大学の新棟 (E 棟) に CALL 教室 (メディア室) が設置されてから、筆者はこれから説明するランゲージラボをスタートさせた。同メディア室では、2014 年度までは Windows XP が設置されていて、「サウンドレコーダー」(次項で説明) の録音時間が 1 分間に制約されていた。2015 年度からは和光大学のメディア室の Windows パソコンは Windows7 に移行し、サウンドレコーダーの録音時間は、ほぼ無制限に使用可能となり、学習者にとって使いやすくなった。ここでは、具体的にどのような手順を踏んで録音するのか、そして、録音したファイルをどのように確認して評価、活用するのかについて詳しく説明する。

3.1. 音声録音の手順

音声録音は、メディア室に設置されている Windows7 のアプリケーションプログラムの一つである「サウンドレコーダー」を使用して行った。サウンドレコーダーは、Windows のスタートメニューに表示されている「すべてのプログラム」から「アクセサリ」、「サウンドレコーダー」の順番でクリックして起動する。起動すると、画面に横長の小さなウィンドウが表示される。次に、ミュート (サイレントモード) を解除する必要があるので、画面右下のタスクバーの赤丸に斜線の入ったスピーカー部分をクリックして音量 (ボリューム) の小ウィンドウを表示させ、中の赤丸をクリックし、赤丸を消す⁽³⁾。

これで、録音と再生の準備が整ったことになる。実際に録音の準備ができたなら、サウンドレコーダーの小ウィンドウ中の小さな赤丸をクリックして録音を開始し、再度クリックして録音を終える。録音が終わったら、音声ファイルを保存する。学生はあらかじめマイドキュメントに専用のフォルダーを作成しておき、ここに、毎回、自分のファイルを保存しておく。筆者の授業では、保存するファイル名は、毎回の授業で「学生の名前+番号」

を指定して板書しておいた。例えば、第1回目の授業では、name1と板書して、田中一郎という学生の場合は、tanaka1またはtanakaichiro1というファイル名を付けて保存するように指示した（いずれも、これらのファイル名の後にメディアプレーヤーのextension記号である.wmaを付加することを忘れないこと）。ちなみに2回目の授業では、name2、3回目の授業では、name3というように、重複を避けるために毎回ファイル名を変えて指定した。なお、音声ファイルの保存は、デスクトップを指定して保存してもよいが、メディア室のパソコンでは、ログアウトすると自動的に消去されてしまうので、マイドキュメントのフォルダーへの保存をお勧めする。

学生が録音した音声ファイルを保存したら、次は、教員のフォルダーへ提出するように指示しなければならない。提出方法は、画面左のショートカットメニューに表示されている教室名のアイコン（例えばE201）をダブルクリックし、その教室を使用している教員の専用フォルダーリストを表示させる。次に、その担当教員のフォルダー（例えば、筆者のフォルダーを例にとると「MIYAZAWA 英語 14」）をダブルクリックして、「提出用」フォルダーをクリックする。ここに学生が自分で作成した音声ファイルをドラッグしてドロップする。

なお、教員の専用フォルダーは、あらかじめ年度初めに専用の届出用紙に記入して情報システム係に依頼し作成してもらっておくこと。

3.2. 音声ファイルのチェック方法

学生が音声ファイルを提出したら、教員は、それらを一つ一つヘッドセットを使って再生して聞き、評価しなければならない。教員が行う手順としては、画面左のショートカットメニューに表示されている教室名のアイコン（例えば、E201 メディア室1）をダブルクリックし、自分の専用フォルダーを表示して、提出用フォルダーを開く。学生が提出したファイルを一つ一つクリックすれば録音した音声聞ける。CALL 教室以外の場所、例えば、図書館のメディアサロンのパソコンからも授業用フォルダーをアクセスすることができる。その場合は、「スタート→授業用フォルダー一覧」をクリックして、メディア室1～9のショートカットメニューが表示されたら、その中から自分の教室のフォルダーをクリックすれば音声を聞くことができる。

さらに、教員の自宅のパソコンから、大学のメディア室のフォルダーにアクセスして提出された音声を聞くこともできる。これは、SSL-VPN サービスと呼ばれ、和光大学の情報館（情報システム係）が提供している。非常勤講師など学内にいる時間が限られている教員には、とても便利なサービスだ。筆者も授業の後で毎週この機能を利用して自宅から大学のフォルダーにアクセスし、学生一人一人が提出した音声ファイルをじっくり聞いて評価している。SSL-VPNというのは、SSLというインターネット上の通信を暗号化する技術（暗号化通信技術）を利用したりリモートアクセスサービスで、これを利用することで自宅と大学間で送受信するデータが暗号され、安全に通信することができる。このサービ

スを利用すれば、学内のフォルダーのみならず、学内限定のホームページ（図書・情報館で提供しているオンラインデータベース、パスワード変更など）も使うことができるので便利だ。このサービスに特別なソフトウェアは必要なく、SSLに対応したブラウザがあれば利用可能だ。例えば、Internet Explorer、Safari、Google Chromeなど、多くのブラウザがSSLに対応している。学内のフォルダーへのアクセス方法は、和光大学のホームページから、以下のような手順で進める。

http://www.wako.ac.jp/icc/service/ssl-vpn_service.html

「利用方法」—「ログイン」欄から、以下をクリックする。

<https://vgate.wako.ac.jp/>

小ウインドウのログイン画面が表示されたら、ユーザー名とパスワードを入力して「ログイン」ボタンをクリックする。ログインすると、「授業用フォルダー」（授業用フォルダー利用の方はこちらから）と表示されるので、「授業用フォルダー」をクリックする。次に、「認証が必要です」という小ウインドウが表示されて、再びユーザー名とパスワードの入力を要求してくる。入力して「送信」ボタンをクリックすると教室名一覧が表示されるので、自分の教室名（例 E201）をクリックして専用フォルダーを表示させる。実際のアクセス手順を画面表示で説明した詳しいマニュアルが入手可能なので、必要ならば図書・情報館まで問い合わせのこと。

http://www.wako.ac.jp/icc/manual/file/vpn_win_20150611.pdf

4. 授業での英語音読の進め方

4.1. ランゲージラボを使った音読の目的と効果

ランゲージラボの特性を生かしてより効果的に使うために、筆者はメディア室での英語の授業で主として音読学習を取り入れた⁽⁴⁾。音読学習を通して学生に英語により興味を持たせて積極的に学習に取り組ませる動機づけを行い、そのことにより、英語学習を効果的に進め、結果としてより実践的な英語力が身に着くと考えたからである。

ランゲージラボを使用して学生が音読を録音して聞くことで、学生自身が自分の音読を客観的に聞いて分析することが可能となる。自分の音読を何度も聞き返すことにより、発音やアクセント、イントネーションを始めとする読み方を確認でき、修正できる。ランゲージラボなどの録音に頼らずに自分自身でこの確認と修正作業を行おうとすると、かなり難しい。というのは、元々人間は、自分の声や話し方を聞いているようで聞いていない、つまり正確に聞き取れていないからである。その理由は、話者の声は骨伝導を通して伝わるので実際に自分がしゃべっている声と相手が聞いている声にはギャップがあり、それら2つは異なるからである⁽⁵⁾。このため、自分の声をパソコンに録音して聞いてみると、自分がいつも聞きなれている声とは違うので、ほとんどの学生、あるいは学習者は最初は違和感を覚えて聞くのをいやがってしまう。しかし、録音して何度も聞き返すことにより

自分の声に慣れてくれば、自分の音読を客観的に聞き取ることができるようになる。そうすれば、教師やCDのネイティブスピーカーの音読と自分の音読のギャップが理解でき、適切な指導を受けることにより、それらを修正してできるだけ教員やCDの音読に近づけようという気持ちになり、音読の上達につながる。基礎的な音読が上達すれば、文章の内容を意識した高度な音読へとつなげることができる。

このように、ランゲージラボでは、学習者が客観的に学習者自身の音読を聞き取ることができるので、学習者自身が自分の音読を矯正していくことができる。ランゲージラボでの音読学習を効果的に進めるためには、指導者及び学習者がこの点をはっきりと認識してランゲージラボの学習に取り組むことが大切である。

ここでもう一つ、黙読と比較した場合の音読の効果は、現在では、複数の脳科学者及び言語学者⁽⁶⁾が提唱し研究で実証している⁽⁷⁾。その一人である川島隆太（東北大学教授）は、「音読により、脳の前頭前野が活性化され、しかも、我々日本人が英語の文書を音読するときには、言葉の意味や文章の仕組みを考えることが多くなり、日本語の音読よりも脳の広い部分を使うことがわかった」⁽⁸⁾と述べ、英語の音読の有用性を強調している。

音読は、語学学習の4技能である「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」のうち、書くことを除いた、「読む」、「話す」、「聞く」の3技能を鍛えることができるというメリットがある⁽⁹⁾。読むという行為は、本来、情報を学習者の脳に取り込む受動的な行為であるが、情報を相手に伝える能動的な学習の役割を果たすこともできる。例えば、音読する際に周囲に聞き手を置くことで、学習者自身に「自分が読んだ内容を相手に伝えたい」という気持ちが生まれ、受動的な行為に加えて能動的な行為も兼ねることができる。さらに、物語を音読して誰かに聞いてもらう場合は、物語の内容を聞き手に伝えなければならないので、読み手は聞き手といわゆるコミュニケーションをとろうとするであろう。そのため、英語の音読では、発音やアクセント、イントネーション、スピード、語句の区切りなどに注意して読み、さらには聞き手に意味が伝わるように、無意識的に感情を込めて読もうとする。この傾向は、筆者の授業でも多くの学生に見られた。

音読により、正しい英語の発音やアクセント、イントネーションなどが身につけば、英会話で必要な音声器官の訓練ができたことになる。また、同じ文章を何度も繰り返し音読しているうちに読んだ文章が記憶されれば、発話（会話）に役立ち、音読する文章が実際の会話や口語体を含んでいる場合は、英会話に特に効果的であると言えよう。さらに、口頭でネイティブスピーカー並みの発音やイントネーションを駆使した話し方ができれば、同様の文章を耳で聞いたときに正確に聞き取ることができるので、リスニング（聞き取り）の力をつけることもできる。つまり、音読することで情報が学習者の脳に取り込まれ、脳に文章が蓄積されれば、物事（文章）を聞いたときにすでに脳に取り込まれている文章を即座に参照できる。これにより様々な類推が可能となり、リスニングに効果がある⁽¹⁰⁾。

このように考えると、音読は、語学教育の様々な面で有益なので、講読や会話の授業に限らず、音読する内容を工夫することにより、文法中心の授業でも補助的に音読の手法を

取り入れることで学習効果を促し、無機質な授業を活性化させることができよう。実際に筆者の授業（英語 14a.b）を受講した山口隆洋君は、和光大学の 2017 年度版入学案内のパンフレット（15 ページ）に次のように書いている。「一つの英文で、文法、翻訳、発音を同時に学べることはユニークだと思います。（この授業を受講したことで）英語に対する苦手意識がなくなり、積極的に英語に向き合えるようになりました」

音読をしたことにより、文書を書くことが得意になったという報告もあるが、これは、音読した内容が脳に定着し、語彙力や知識が増えた結果と考えられる。

筆者の主宰する語学スクールで、音読の効果について採ったアンケート（2008-2014 年に 12 歳～25 歳の生徒を対象に行った）では、以下のような回答があった。(1)英語に対して自信が付き、積極的になった。(2)英語の語彙が増えて英会話が上達した。(3)集中力が持続するようになった。(4)ストーリーをたくさん読んだので知識が増えた。(5)暗記力がついた。(6)英語に限らず話すことが得意になり人前で話す自信が付き、自分の意見が言えるようになった。

4.2. 効果的な音読とは

音読をして前項に記述したような効果を上げるためには、まず、これから読もうとする英語のテキスト（ストーリーなど）の内容をよく理解することが大切だ。どんなにスムーズに音読ができて、内容を無視して字面だけを読み進むようなうわべだけの音読は何としても避けなければならない。そのためには、学習者は事前に読むテキストの単語や語句の意味を調べて内容把握に努めておかなければならない。筆者の授業では、英文テキスト⁽¹¹⁾の音読するページのストーリー（200~300 語程度）の日本語訳を前週の宿題にした。次週の授業では、学生をランダムに指名して 1 文ずつ口頭で日本語訳を発表させた。次に、ストーリーの内容確認のための簡単な Q&A を行った。その後、発音学習及び発音矯正を目的としたフォニックスのショートプログラムのプリント⁽¹²⁾を配布し、英語の発声法や主要な母音と子音を指導した。

テキストの内容と発音の注意点がわかったところで、ゆっくりとしたスピードでテキストを 2~3 回クラス全体でコーラスリピートした。この時点では、ストーリーの意味を考えながら語句の切れ目を意識して読むように指導した。必要ならば、語句の切れ目がわかるようにテキストに斜線を引くように伝えた。また、感情を込めて読めるようにするため、内容的に大切だと思われる部分の語句を丸で囲んだりアンダーラインを引くようにアドバイスした。

その後、各自 1~2 回読み終わった時点で相手を決めてペアプラクティスをさせた。このペアプラクティスの目的は、ランゲージラボで自分の音読を客観的に把握するための前段階として、第三者に自分の音読を客観的に評価してもらうことにある。この進め方としては、まず二人でゆっくりと同時に読み進み、どちらかが読めない部分はお互いに助け合って正しく読めるように指導した。ある程度慣れてきたところでペアチェックシートを配

布してペアの相手の音読をチェックさせた。このペアチェックシートを使った練習では、各ペアにそれぞれ1分間程度時間を与えて音読させ、もう一方のペアの相手に音読をチェックさせた。ペアチェックの方法は、まず、ペアチェックシートに自分の名前を記入したらシートをパートナーと交換し、チェックするパートナーの名前を記入させた。次にペアのどちらか一方の学生が、クラス全体で一斉に音読をスタート。1分間経過したら筆者(教員)が「Stop」の号令をかけて音読を終了。ここで、もう一方のパートナーがシートに1分間で読めた行数を記入し、チェック項目にチェックを入れてコメントを記入させた。チェック項目は、「発音」と「声量」で、発音は[very good/ good/ so-so/ not good]、声量は[big/ so-so/ little/ very little]のそれぞれ4段階で評価させた。コメント欄には、流暢さやアクセント、イントネーション、内容を理解して読めたかなど、気が付いたことをできるだけ具体的に書かせるように指導した。記入が終わったところを見計らって読み手を交代して1分間音読させ、同様にもう一方のパートナーに評価させた。

このシートは授業終了時に教員に提出させて、教員が評価のコメントを記入して翌週学生に返却した。ともすると学生対学生の評価はなれ合いになりがちだが、前述したとおり、ペアチェックシートには、評価する学生の名前を記入して後で教員がチェックする方式を取っていたので、評価する学生に客観的に評価しようという責任感が生まれ、学生同士のなれ合いの甘い評価はほとんど見られなかった。むしろ辛口の評価が多かった。ペアチェックでは新鮮さを与えるために、できるだけ毎回相手を変えて練習させた。

時間があるときは、ペアで内容把握の音読ゲームをさせて意味を考えながら読む癖をつけさせた。ペアの音読ゲームの一例としては、口頭での空欄補充ゲームで、ペアの一人がテキストを閉じ、もう一人がテキストを見ながら文章を読み進み、1か所、単語または語句を空欄にする。つまり、その単語や語句の代わりに「う————ん」などと言って、ペアの相手に「う————ん」の部分の単語や語句を当てさせるというもの。

(例) About a year later, Titus became a _____ (「う————ん」)

答え (Christian) (* 『Tell Me A Story!』(南雲堂刊)、p20 より)

また、このペアプラクティスやゲームの他に、音読をさらにスムーズに行い練習に変化を与えるために、速読の練習も時々取り入れた。高速で音読をすることも語学学習では重要な要素であり、単調になりがちな音読練習に変化を与えるという意味でも大切な練習であると考えた。筆者が別のコース⁽¹³⁾で速読中心の授業を展開したことがあるが、高速で読めたときの学習者の達成感はかなり大きい。今回はあくまで補助的に速読練習用に単語のリストを使った即席認識練習のシートを作成した⁽¹⁴⁾。

ペアチェックが終わったところで各自のブースに戻り、ヘッドセットとマイクを使って各自音読作業を始めた。まず、前記した音声録音の手順に従って音読を録音させ、何度も聞き返してチェックさせた。そして、満足のゆく録音ができたところで提出させた。録音

内容は、その週に配布したフォニックスのプリントとテキストのストーリーのページを指定した。

5. 音読の音声録音ファイルのチェックと学生へのアドバイス

筆者は、授業終了後、学生の提出した音声ファイルを聞いた後で、音読評価シート⁽¹⁵⁾を用意して学生一人一人の音読に評価をつけて、翌週、学生に返却した。これは、フィードバックの必要性からで、学生の向上心を上げるのがねらいだ。このシートには、発音、スピードと流暢さの2つの項目に1（最低）から5（最高）までの5段階評価とコメントまたはアドバイスを付けて返却した。コメントまたはアドバイスは、学生が自分の音読を少しでも改善できるように、できるだけ具体的に書くように努めた。また、学生の努力を認めて励ます意味で、彼らの音読の良かった点を見つけて、どんな小さなことでも見逃さずに付け加えるようにした。

この評価シートのおかげで、学生たちは自分たちの録音した音読の評価と出来具合を具体的に知ることができ、次回の音読の参考になったようだ。最初は授業に消極的だった学生も、この評価シートで自分の音読の状況を具体的に指摘されることにより、雑談が減り、積極的に自分と向き合って真剣に取り組もうという姿勢がみられるようになった。特に、音読が少しでも改善されれば肯定的なコメントが書かれているので、次もさらによくするように頑張ろうという気持ちが芽生えたようだ。筆者が評価シートの返却を忘れていると、消極的だった学生が催促してくるようになったのは、大きな進歩だった。いつまでたっても改善が見られない学生や問題の多い音読をしている学生については、シートの返却時に直接、その学生の元に行き、その理由を聞いてアドバイスを与えるようにした。

この評価シートの導入により、一方通行になりがちな授業が避けられ、学生と双方向に近いコミュニケーションができたのは大きな収穫である。その意味で、この評価シートは大いに役立った。

6. まとめと今後の課題（学生の反応、成果）

「授業での英語音読の進め方」の項で説明したように、学生たちは、始めは、骨伝導で伝達した自分の音声と実際の音声のギャップにより、ヘッドセットで録音した自分の声を聴くのをためらい、周囲の学生が気になり、なかなか大きな声で音読できなかった。しかし、録音した自分の音声の聞き取りに慣れるにしたがって、自分自身と向き合う姿勢が生まれ声量も大きくなっていった。

年度初めは、機器の設定が十分でなかったりヘッドセットの不具合等により、パソコンでの録音がうまくいかないときがあり、学生たちは戸惑うこともあった。そんなときは、システムの担当者の力を借りながら彼らに正しい設定をアドバイスしたりヘッドセットを

取り替えさせたりして対応した。それでも不具合が改善されないときは、時間節約のために、教員（筆者）のところにきて直接音読するような選択肢も与えた。これにより、直接学生と向き合ってコメントとアドバイスを与えるチャンスが得られたのはよかった。

今回の筆者の授業では、パソコンを使ったランゲージラボでの一つの学習形態として、ストーリーのテキストとフォニックスの音読学習を取り入れたわけだが、この組み合わせに関して、果たして学生が興味をもって取り組めただろうか、また、実際の学習効果はどうであったろうか。これらの点について客観的かつ具体的なデータによる比較評価は今後機会があれば検証してみたいが、まず、その前段階として、筆者が期末に学生に文章による記述式のアンケートを取ったのでそれらのいくつかをここで紹介したい。

[アンケートの紹介]

(2015年度・英語 14a.b、17.a.b の授業を受講した学生を対象とした記述式のアンケート)

・学生 S.K.—————

「私にとって英語を読むことは難しく、苦手でした。しかし、1年間この授業を受けて、私は成長することができ、苦手意識を克服することができたと思います。この授業は今回で終わりますが、私はこれからも（英語を）勉強していきたいと思います」

・学生 Y.H.—————

「この授業を受ける前は英語に苦手意識をもっていたが、授業を受けてみると、楽しく参加できて英語が好きになれた」

・学生 N.H.—————

「始めは不安でしたが、少しずつ理解できるようになりました。今まで苦手だった英語が楽しめる授業でした。ありがとうございました。2年生以降も勉強していこうと思っています」

・学生 R.H.—————

「英語に対する気持ちが良い方向に変わりました。楽しいと思えたからです。今後も頑張ります」

上記のアンケートに回答した学生の全 28 名中 25 名（約 90%）がこの授業の英語学習について肯定的な意見を書いた。それらを項目別にまとめてみると、最も多かったのが、「英語が好きになった」、「英語が楽しいと感じるようになった」=19 名、次に「英語に積極的に取り組もうという気持ちになった」=18 名、「英語に対する苦手意識がなくなった」=13 名、「英語力が向上した」、「英語が理解できるようになった」、「発音が向上した」など=11 名となり、この授業に対して肯定的な回答が多く寄せられた。一方で、「英語に対する苦手意識は克服できなかった」という否定的な回答をした学生が 3 名（全体の 10%）いたことも事実として受け止めなければならない。なお、上記の回答で、多くの学生が「ランゲージ

ラボを使った英語の音読の授業が楽しい」と感じた理由を分析してみると、(i) 高校までの無味乾燥な和訳と文法中心の受験英語から、口頭での英語学習の比重が増えたこと、(ii) 若者が好むパソコンというハイテク機器を取り入れての授業だったこと、(iii) 他人と比較するのではなく、あくまで自分と向き合って自分の力を向上させることに主眼が置かれていたこと、(iv) 自分と向き合えば向き合うほど達成感が得られ、自分自身が向上したということがわかるので、やりがいが生まれて英語学習に対してさらに熱心に取り組むことができたという点が背景にあったと考えられる。

今後の課題としては、現在のランゲージラボでのストーリー・テキストとフォニックスの音読中心の授業に関して概ね肯定的な意見が多かったので、現在の方向性を保ちながら検証し、さらに一人でも多くの学生が英語に対する苦手意識を克服できるように何らかの工夫をすべきであろう。また、上記で記述したような機器の不具合を含めて、システム系の担当者の協力または補助を得ながら、いくつかの問題点を克服することが求められる。例えば、パソコン上のいくつかの問題点（ヘッドセットのマイク機能に不良品が多い、サウンドレコーダーの機能の不具合による再起動の必要性など）の改善や学生の側の機器の設定の不備（ヘッドセットのヘッドフォンとマイクのプラグの指し違い、ミュートの解除のし忘れなど）に上手に対応することなどだ。

今回の試行の発表を通じて、より多くの教員が再びCALL教室のランゲージラボの機能を活用して実践的な英語の授業を展開してくれることを祈って本研究のまとめとする。

— 注

- (1) 和光大学でのCALL教室の正式名称は「メディア室」
- (2) 2016年7月時点で情報システム系の担当者が把握していたマイク付きのヘッドセットのマイクを使用した授業の記録によると、サウンドレコーダーを使用したマイクのいわゆる「ヘビーユーザー」は筆者の授業のみであった。
- (3) Windows10の録音方法は異なる。将来的にメディア室のパソコンがWindows10に変更されたときは、サウンドレコーダーの代わりにボイスレコーダー機能を使用する。詳しい使い方は、「Win10ラボ」を参照のこと。<http://win10labo.info/win10-voicerecorder/>
- (4) 本研究の「はじめに」の部分で記述したように、2年生以上のクラスを担当したときは、メディア室の特徴を最大限生かして、音声学を中心とした音読の授業を展開したこともあった。
- (5) Johnson, Aaron, Ph.D. “*Research on human voice*”, Department of Speech and Hearing Science, University of Illinois.
<http://labs.shs.illinois.edu/Faculty/Bios/AJohnson.aspx> (閲覧日：2016年8月10日)
- (6) 川島隆太、茂木健一郎、斎藤孝などが提唱している。
- (7) 川島隆太、『脳と音読』、講談社、2004年、pp3-5
茂木健一郎、『鶴の恩返し勉強法』、NHK日本放送協会
<http://www.nhk.or.jp/professional/2008/0429/> (閲覧日：2016年8月7日)
なお、英語の授業での音読の実際の効果及びその詳細については、筆者の別の研究論文“Effective Reading for Listening”, Newport University, 1998, pp62-69で詳しく触れている。
- (8) 川島隆太、『頭がよくなる朝10分の習慣』、PHP研究所、2004年、pp42-56
川島隆太、「新聞の音読」、(信濃毎日新聞)<http://www.matsusen.jp/ondoku/ondoku2-1.html> 閲覧日：2016

年 8 月 7 日（「音読が脳に与える効果は、『単語記憶力テスト』でも確かめられました。このテストは、用意した単語を 2 分間でどれだけ覚えられるか、小学生 10 人に試してもらったものです。音読を続けた後にテストをすると、単語の記憶力がふだんより 20% 以上もアップしていました。これは、音読によって前頭前野がウォーミングアップして、いつもより活発に働いたからだと考えられます。毎日、音読を続ければ、前頭前野の働きはもっともっとよくなる可能性があるのです。～（中略）～日本人である私たちが英語の文章を音読するときは、言葉の意味や文章の仕組みなどを考えることが多くなります。そのため、日本語の音読よりも、前頭前野をはじめ、脳の広い部分を使うことがわかりました」)

- (9) 参考：Miyazawa, Masayuki Massey, “Whole-Brain-Based Oral Reading”, 『和光大学表現学部紀要 16』、2016 年 3 月 11 日、pp152-154
- (10) 脳科学者らによれば、五感を多く使えば使うほど記憶に印象付けられるので覚えたことが忘れにくくなる。音読は五感を使うので、読んだ内容が脳に定着するという研究結果がでている。茂木健一郎、『鶴の恩返し勉強法』、NHK 日本放送協会、<http://www.nhk.or.jp/professional/2008/0429/>（閲覧日：2016 年 8 月 7 日）
参考：1992-2011 年に行われた研究参照。Miyazawa, Masayuki Massey, “Whole-Brain-Based Oral Reading”, 『和光大学表現学部紀要 16』、2016 年 3 月 11 日、pp152-153
- (11) 筆者は、クラスのレベルに応じて、ランゲージラボで以下のようなテキストを使用してきた。2015 年以降は、②と③を使用している。

基礎レベルのクラス

①Molinsky, Steven J. & Bliss, Bill, *SIDE BY SIDE, Book 1*, Pearson Education Longman, New York, 2001

②赤川裕、『A SHORTER COURSE IN SITUATIONAL CONVERSATION』、南雲堂、2003 年 3 月
基礎～中級レベルのクラス

③ブライアン・ポール、ケネス・ケンドリック他、『Tell Me A Story!』、南雲堂、2007 年 1 月

中級レベル以上のクラス

④石黒明博他、『発信型 実践英語音声学』、金星堂、1992 年 1 月

⑤Miyazawa, Masayuki Massey, *Pera-Pera Dialog*, バイリンガルキッズ、2003 年 4 月

- (12) “Phonics Remedy”(発音矯正ショートプログラム)というタイトルで、筆者が作成した簡易音声学の演習プリントを使用した。その内容は、主要母音 A.O.U/R と L/TH (無声音と有声音)、S と C の音を含む単語 (対比練習)、S と Z の音を含む単語 (対比練習)、S と SH の音を含む単語 (対比練習)、S と TH の音を含む単語 (対比練習)、F と V の音、of や to などの語を含む語句の短縮音 (reductions)、H や TH の短縮音(reductions)、should/must/would/could+have の短縮音 (reductions) などを種類別にまとめて 15 枚のプリントにした。授業では、これらを毎週、1 枚ずつ使用した。
- (13) 2006 年から 2010 年まで、神奈川県立外語短大の Intensive Reading 及び Extensive Reading の授業で速読の練習を取り入れた。
- (14) 速読練習シート (例)

Speed Reading Practice 1 (single word)

Please circle the same words in 15 seconds! Follow the example 1.

1. hot	<u>hot</u>	hat	<u>hot</u>	<u>hot</u>	hop	hit
2. down	down	down	dow	dawn	drown	
3. blow	blow	blow	blew	blow	below	
4. strange	strange	strange	strong	strange	strong	
5. step	stop	step	step	step	spot	
6. group	groop	grope	group	group	grope	
7. thing	think	thing	think	thing	third	
8. mark	mast	mark	mask	mark	mart	

Speed Reading Practice 2 (Word Phrases)

Please circle the same phrases in 15 seconds! Follow the example 1.

1. a lot of	lots of	a lot of	a lot of	lot
2. every day	every body	every day	every one	every day
3. look for	look for	look for	look forward	look up
4. come back	came back	came back	come back	come back
5. stand up	stand up	stand up	stand at	stood up
6. kind of	kind to	kinds of	kind to	kind of
7. take off	take off	took off	take on	take off
8. get ready	get going	get along	get ready	get ready

(15) 音読評価シート

Name (/)	Textbook (P=発音 S=スピード、流暢さ)	Handout
	P = /5 S = /5	P = /5 S = /5
十分練習してから大きな声で録音しよう！		

—— 参考文献一覧

書籍、論文

- 赤川裕、『A SHORTER COURSE IN SITUATIONAL CONVERSATION』、南雲堂、2003年3月
 石黒明博他、『発信型 実践英語音声学』、金星堂、1992年1月
 川島隆太、『脳と音読』、講談社、2004年4月、pp 3-5
 川島隆太、『頭がよくなる朝10分の習慣』、PHP 研究所、2004年4月、pp 42-56
 プライアン・ポール、ケネス・ケンドリック他、『Tell Me A Story!』、南雲堂、2007年1月
 Miyazawa, Masayuki Massey, M.A., “Effective Reading for Listening”, Newport University, 1998, pp 62-69
 Miyazawa, Masayuki Massey, “Whole-Brain-Based Oral Reading”, 『和光大学表現学部紀要 16』、2016年3月11日、pp 152-154
 Miyazawa, Masayuki Massey, *Pera-Pera Dialog*、バイリンガルキッズ、2003年4月
 Molinsky, Steven J. & Bliss, Bill, *SIDE BY SIDE, Book 1*, Pearson Education Longman, New York, 2001

Websites:

川島隆太、『新聞の音読』、(信濃毎日新聞)

<http://www.matsusen.jp/ondoku/ondoku2-1.html> (閲覧日：2016年8月7日)

茂木健一郎、『鶴の恩返し勉強法』、NHK 日本放送協会

<http://www.nhk.or.jp/professional/2008/0429/> (閲覧日：2016年8月7日)

Johnson, Aaron, Ph.D. “Research on human voice”, Department of Speech and Hearing Science, University of Illinois, <http://labs.shs.illinois.edu/Faculty/Bios/AJohnson.aspx>

(閲覧日：2016年8月10日)